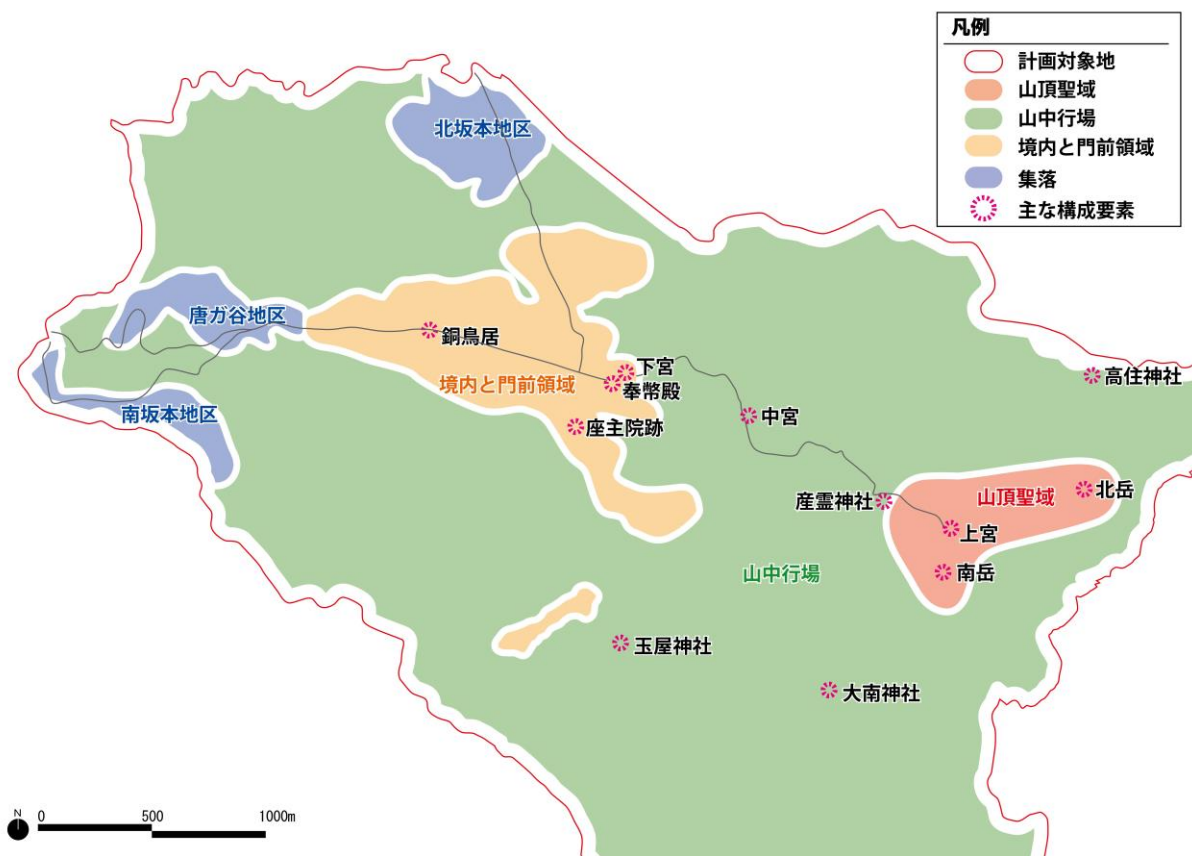


③英彦山の空間構造

英彦山の空間構造は、下記に示す四界領域に分けられる。

図表 49 英彦山の空間構造の名称と概要

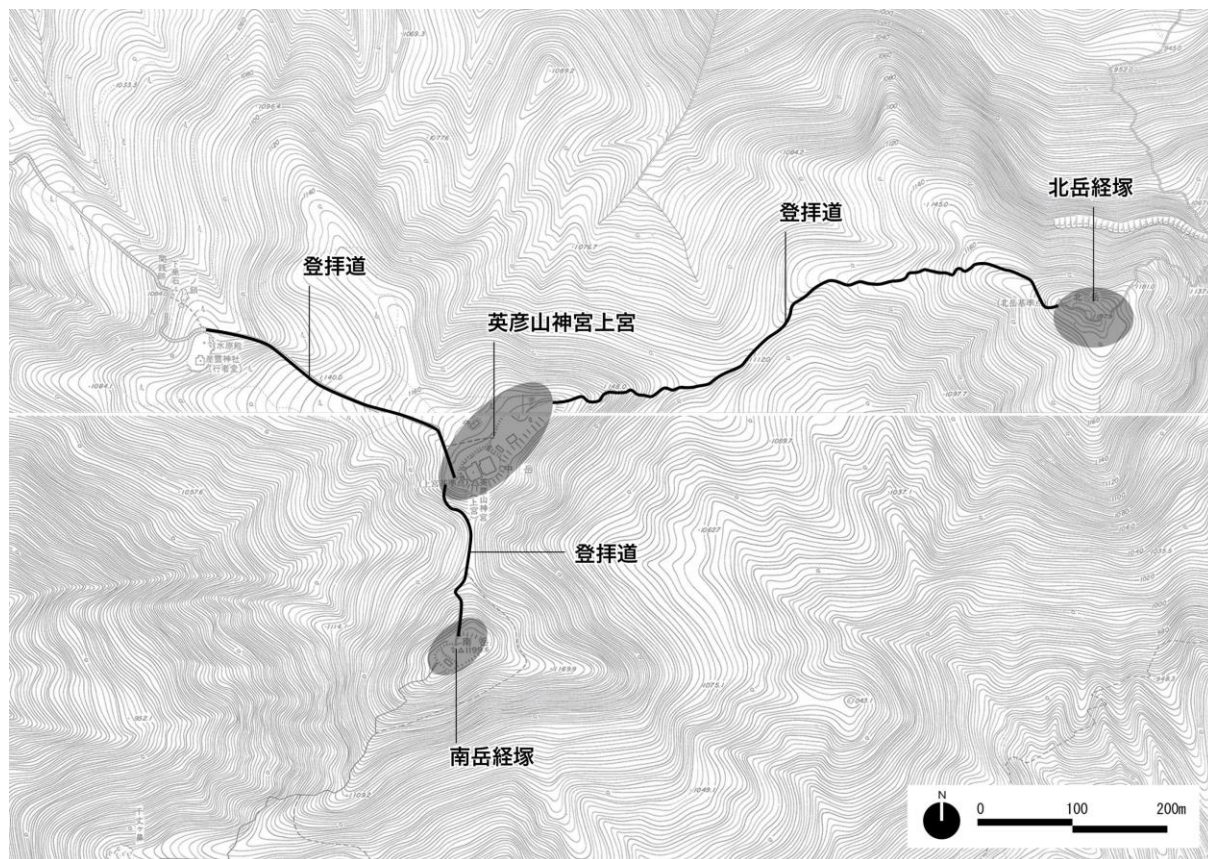
名称	概要
山頂聖域	英彦山の山頂及びその周辺に位置する。 山中行場に囲まれ、上宮社殿や経塚遺構等がある。
山中行場	英彦山の中腹から下腹に位置する。 山頂聖域や境内と門前領域等を囲み、修行窟や峰中宿等がある。
境内と門前領域	英彦山の中腹に位置する。 英彦山大講堂（奉幣殿）より下に位置し、社殿伽藍や宿坊跡等がある。
集落	英彦山の下腹に位置する。 銅鳥居の下に凡聖が雑居する集落がある。



2) 構成単位

i. 山頂聖域

山頂聖域には、山頂経塚の遺構や英彦山神宮の社殿がある。



図表 50 山頂聖域の構成単位的位置

①山頂経塚

山頂経塚は、経典を英彦山の山頂の土中に埋納した塚である。経典は、筒形の容器である経筒に納められている。

英彦山における経塚造営は、12 世紀には始まっていたとされる。現在までに、経塚と複数の経筒が南岳及び北岳において検出されている。英彦山神宮は、昭和 57（1982）年からの英彦山学術調査以前に、南岳出土 5 口分、北岳出土 1 口分の経筒を保管管理している。

■南岳経塚

南岳においては、平成 17（2005）年度の調査で、経塚 1 基が検出されている。経塚は、不正方形を呈する小石室を形成し、その上に扁平な石材を 4、5 段積み上げており、この中から経筒が検出されている。

■北岳経塚

北岳においては、昭和 57～59（1982～1984）年の調査において、金銅仏と銅筒、経塚 1 基が検出されている。金銅仏は、統一新羅時代の朝鮮半島で製作された渡来仏である。経塚は、

永正 13(1516)年の釈迦誕生会に通蔵坊宿の越後僧慶俊が再埋納されたものであるとされる。北岳で検出された経塚は、南岳で検出された経塚と同様に、地上に 2～3 段扁平な石を積み上げて経筒を覆うような形状である。

②社殿

■英彦山神宮上宮^{じょうぐう}

英彦山神宮上宮は、中岳の山頂に位置する英彦山神宮の御本宮である。祭神は天忍穗耳命である。

『彦山流記』の縁起によると、久安元（1145）年に銅板法華経 10 巻と般若心経 1 巻が奉納されたことが示されている。

建築物は、度重なる火災の度に再建されてきた。現建築物は、天保 6（1835）年の火災後、佐賀藩主鍋島齐正の寄進により、本殿は天保 13（1842）年、拝殿は弘化 2（1845）年に再建された。その後、本殿と拝殿の両建築物は、昭和 7（1932）年に修理された。



図表 51 英彦山神宮上宮

本殿は、高さ約 2 尺の切石基壇上に建つ。平面は、外陣、内陣、内々陣、脇・後陣にわかれ、内陣は奥が約 2 尺高く、中央 3 間に木階 3 級、擬宝珠付高欄を設ける。拝殿は、正面 3 間側面 2 間の身舎、四周 1 間通りに庇、正面に 3 間幅の 1 間向拝が取り付く。身舎後方に造付壇を設ける。四周に霧除がまわり、室内に取り込み、北東部分では霧除を張り出して炉のある部屋をつくる。

■登拝道

登拝道は、英彦山神宮木鳥居から英彦山神宮上宮に至る道である。現在、木鳥居や石段等が残されている。

木鳥居は、産霊神社（行者堂）の北東側に位置し、英彦山の領域の結界を示す鳥居である。これより上部は、仏界とする聖域である。



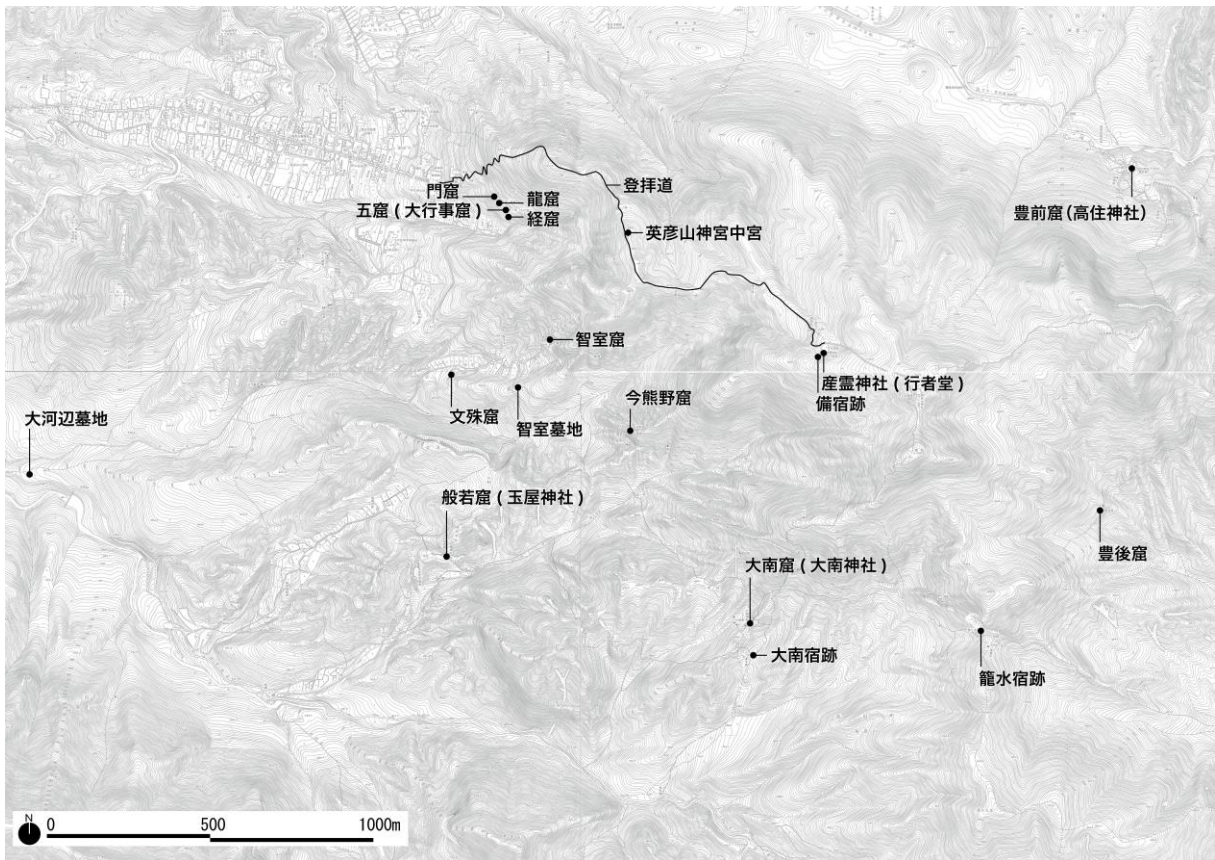
図表 52 英彦山神宮木鳥居



図表 53 石段

ii. 山中行場

山中行場には、峰中宿や修行窟や英彦山神宮の社殿がある。



図表 54 山中行場の構成単位的位置

①峰中宿

峰中宿は、峰入り（入峰）修行における山伏の勤行や寝所となる宿である。

英彦山の入峰行の始まりは明確ではない。前段階の窟籠修行により験得する単独行に対し、集団行として体系化され「擬死再生」を目的とし、「十界修行」を基本とした入峰行は、室町時代後期頃に開始されている。

彦山入峰は、文安2（1445）年の奥書の『彦山諸神次第』において、三季入峰のことが記されており、15世紀中頃までには定着していたことが分かる。熊野・大峰山・吉野における大峰入りに由来があると言われている。

熊野・大峰山・吉野における大峰入りは、「胎蔵界」^{「たいざうかい」}を熊野、「金剛界」^{「こんごうかい」}を吉野とし、山伏はこの二つを結ぶ大峰山における修行を通じて即身即仏となり、民衆を済度^{さいど}するための厳しい修行をしていたとされる。

英彦山では、熊野・大峰山・吉野における大峰入りにならない、英彦山を「胎蔵界」、宝満山を順峰の「金剛界」、福智山を逆峰の「金剛界」としている。順峰は、「春峰」や「胎蔵界入峰」とも称され、英彦山を拠点に宝満山へ往復する2月15日～4月初旬（近世は4月9日）までの入峰を指す。同じルートを3月10日に駈入する「順逆不二峰」は、「夏峰」や「華供峰」とも称されている。逆峰は、「秋峰」や「金剛界入峰」とも称され、7月晦日に駈入、英

彦山から福智山へ往復する（近世は9月4日出峰）入峰を指す。これらは「三季入峰」と称され、往復約130kmの行程である。

三季入峰は、順峰・逆峰ともにそれぞれ48宿が配置され、仏となるための十界の修行が行われた。英彦山胎蔵界から宝満金剛界、及び福智金剛界を出て、再び英彦山胎蔵界に戻る。このことは、「擬死再生」を意味し、峰入修行をすることで一度生まれ変わったということになる。峰入修行の回数は、山伏の位階にもつながる。36度の峰入修行をした山伏は、だいおつけ大越家と呼ばれる最高位に達したとされる。

英彦山における山内宿は、下宮、中宮、備宿、籠水宿、大南宿などがある。



図表 55 三季峰入りのルート

■ 備 宿

備宿は、高皇産霊神（高木神）を祀る堂社と関伽井水原社がある境内地の南側背後に位置し、行屋長床が設けられている。上宮山頂より西に延びる尾根に直行するように、300 m²程の平坦面を造成した建築物跡が確認されている。

建築物跡は2間×5間の礎石建築物跡で、南北に長軸を置く建築物である。明確ではないが、中央に火床と思われる石積み状の高まりが確認されている。建築物の構成は、単純棟で庇、縁などの付帯部はなく、大宿としての行屋長床にあたるものとされ、桁行11.8m、梁間2.8mとなっている。

峰入り修行は、この備宿を発宿し、小篠宿勤行を経て、大南宿に入った。備宿では、14日間の参籠修行が行われた。



図表 56 備宿跡（大宿跡）

籠水宿

籠水宿は、南岳山頂の東南側に位置し、直線距離で600m程の標高970mの場所に位置する。七八童子（15童子）を祀る重要な宿である。また、英彦山と日田との分岐籠水峠に所在する参籠宿であり、猫の丸尾及び岳滅鬼峠へと向かう重要な拠点宿であった。中世、彦山胎蔵界行の参籠宿として、この峠頂部下には大宿とみられる長平場と薬師峠方向に柴宿と思われる平場がある。この平場の面する岩壁上部5mほどの高さの所には小窟がある。これは、役行者が霊水を封じ込めたという籠り水の霊窟とされる。また、「鹿の角」と呼ばれるピークの南側断崖壁下にテラスを造成し、護摩場が形成されている。ここには多くの石製碑伝が立てられている。この碑伝の中には、永正13（1516）年の先達碑伝、永正17（1520）年の座主有厳の華供入峰に碑伝がある。



図表 57 籠水宿跡（大宿跡）

大南宿

大南宿は、大南窟の籠内宿である。『英彦山図』には「峰宿」と表記されている。大南神社から鬼杉へと向かう谷筋に位置する。

大南宿は、幅30m、行き12m、面積250㎡の平坦面が造成され、その中に炉床がある桁行7間（12.6m）、間2間（3.6m）の建築物跡が確認されている。規模から行屋長床とされている。これらから、この施設は大南宿（峰宿）の大宿であったと考えられている。



図表 58 大南宿跡（大宿跡）

②修行窟

古代彦山の修行形態は、籠窟を中心とした籠山修行と考えられている。『彦山流記』によると、49の窟名、故事来歴、宝殿規模、守護童子名等が記載されているものの、全容は不確定な部分もあり判然としていない。現在、所在が推定されている窟は37窟あり、山内には12窟の位置が確認されている。しかし、名称比定が出来ない窟が存在する。

窟の概観は、基本的に山上部を覆う輝石安山岩層の下部にある「耶馬溪層」と呼ばれる安山岩質集塊岩が風化浸食されてできた自然風穴を加工利用したものである。山内の窟は、概ね標高600～800mに点在している。現在、社殿や懸造堂宇を持つ窟は、山内に5ヶ所あり、般若窟（玉屋神社）、大南窟（大南神社）、文殊窟（学問社）、豊前窟（高住神社）、不動窟（下仏来不動堂）が信仰対象として活用されている。その他の山内の窟は、五窟（第5）、智室窟

(第7)、今熊野窟(第8)などがある。また、規模の大きな窟は廊内窟を有している。廊内窟は、蔵持山窟(第2)の空鉢窟(第35)、五窟(第5)の門窟(第44)、経窟(第43)、龍窟(第45)、大行事窟(第5)、鶯窟(第42)、智室窟(第7)の法華窟(第46)、剣窟(第47)、大四王窟、小四王窟(第33)、双戸窟(第25)、今熊野窟(第8)の腰窟、通窟などがある。

彦山窟籠修行の本質は、彦山権現の宝珠(摩尼)を授得する初源的宝珠神体窟に体现化されていることが『彦山流記』に記されている。ここに、49窟の成り立ちや彦山権現の意図が集約されている。

■般若窟(第1)

般若窟は、50mもある陽岩壁の下にできた籠窟に、覆屋を掛けている。陰陽和合を意味し、山岳信仰における「山中他界観」の霊窟とである。行者が胎内修行により宝珠を授得する、という彦山窟修行の根源が示された窟である。

窟の前面は平場があり、法蓮堂跡や奇岩景勝地である鬼仙酔などへと延びる。窟内には、俱利伽羅が出現し、宝珠を吐出したという故事にまつわる小さな御池がある。ここでは、旧暦の6月中旬に英彦山神宮の「御池浚神事」が行われている。また、窟内御池の横には元禄年中に座主相有が安置した石祠があり、池の霊水を汲んだおびたしい土師皿が散乱している。相有は、聖護院門跡との本末異論を唱えるときに、籠窟などの再興を行ったとされ、鶯窟(第42)にも相有の銘が施された石龕がある。

般若窟は、籠山行を通じて彦山権現の宝珠を湧出感得する場所として、信仰されたことがわかる修行窟である。



図表 59 般若窟

■大南窟(第4)

大南窟は、西窟や内窟とも呼ばれる窟である。5間規模の宝殿があり、不動明王(大聖天童)を守護天童としている。岩壁の下にできた籠窟は、覆屋が掛けられている。籠窟手前には護摩壇がしつらえてある。



図表 60 大南窟

■五窟（大行事窟）（第 5）

五窟は、旧英彦山霊仙寺境内地の南東 100m 程に位置し、英彦山霊仙寺の伽藍の一つ「惣大行事社」が置かれていた。

『彦山流記』によると、彦山惣大行事である本地は、十一面観音と記載され、『永徳三年彦山霊仙寺境内大廻行守護神配立圖』においても「七堂大行事堀」と「門堀」の記載がある。本山惣大行事社として七堂に数えられていたことがわかっている。

また、五窟は内窟を有し、経窟（第 43）、鶯窟（第 42）、龍窟（第 45）、門窟（第 44）がある。これらの窟は、大行事窟と合わせて五窟と称されている。鶯窟と推定される窟は、智室谷との境にある「鶯谷」に存在する窟と考えられているが、定かではない。

窟の概観は、5 つの陽岩牀に四箇所に窟穴が存在する。窟配置は、大廻行遥拝所となっていた門窟、大行事窟の位置関係から、北側に門窟、その間に円通滝を擁する龍窟、最も規模の大きな大行事窟、南に経窟という配置であったと考えられている。

大行事窟は、窟穴の前面に石積配石をし、石段門口が設けてられている。更にその前面に幅 15.0m、奥行 6.0m の石積基壇が設けられている。このことから、高住神社（豊前窟）などと同様に、窟内に宝殿を造り、その前面に拝殿を持つ大規模な建築物であったことが分かっている。また、この基壇前面から石段が延び、五ツ谷集落からの参詣道となっている。

五窟は、全体として石積基壇による 40 m²程の平場が造成され、窟同士を結ぶ石畳様の道が布設されている。



図表 61 大行事窟

■智室窟（第 7）

智室窟は、『彦山流記』によると、5 間規模の宝殿があり、虚空蔵菩薩と福地天童を守護天童としている。五窟と同様に、廊内に 5 つの窟（法華窟、剣窟、大四王窟、小四王窟、異本二戸窟）があるとされている。宝生院横筋道から 100m 程ある石積道線を登り詰めた場所に位置し、縦 20m、横 35m で 700 m²の平坦地がある。般若窟、五窟と同様に平場規模の大きな窟であり、北側に宝殿智室社が懸けられていた窟がある。間口は約 19m、奥行 7.5m、高さ 4.5m で、窟内中央部に護摩壇様の自然石があり、奥壁に龕が設けられている。



図表 62 智室窟

■今熊野窟（第8）

今熊野窟は、嘉禎 3（1237）年銘のある磨崖仏と月輪磨崖梵字が彫り付けられている。

『彦山流記』によると、阿弥陀三尊磨崖仏は腰窟、月輪三尊種字の方は通窟という名の内窟であった。

窟の本質は、彦山権現^{ちんぎん}の智慧を授得する場所であり、権現と金剛童子が守護している場所である。そこに磨崖仏、磨崖梵字を彫り付けられたことは、熊野信仰などの流入とともに窟籠修行の本質に変格が生じたと見られている。



図表 63 今熊野窟

■豊前窟（第18）

豊前窟は、北岳の北側に位置し、憐愍童子を守護天童としている。高住神社の社殿がある。



図表 64 豊前窟

■文殊窟（第34）

文殊窟は、智室谷の南側に位置し、佛母童子を守護天童としている。学問社の社殿がある。



図表 65 文殊窟

■門窟（第44）

門窟は、五窟の内窟の一つである。円通の滝から北側 50m の位置にある。幅 7.5m、奥行 5.0m の規模を有し、窟内構底は前傾している。この窟は、懸造社殿が建てられていたものと考えられており、窟内に無数の柱を懸ける孔が空いている。

懸造社殿の規模は、3 間規模と考えられ、少なくとも 3 回は建替られているものとされる。この門窟の前面には、北山殿側に繋がる道線が確認されており、大廻回峰行道となっていたものとされている。



図表 66 門窟

■龍窟（第 45）

龍窟は、五窟の内窟の一つである。大行事窟の北側横に位置する龍窟は、窟穴規模横 7.5m、奥行 3.0m と小規模であるものの、その頭上にある直径 10cm ほどの岩穴から勢いよく水が噴き出している。この様相は、あたかも龍神のようであることから、「龍窟」と名付けられた由縁となっている。『彦山勝景詩集』に挙げられる「円通瀑布」として名蹟ともなった場所であり、現在も「円通の滝」の名で呼ばれている。



図表 67 龍窟

■経窟（第 43）

経窟は、五窟の東側に位置し、大行事窟の南東 30m に位置する。大行事窟の横から出ている道とつながっており、この道は経窟の前面の簡単な石段へと繋がる。横 10.8m、奥行 10m で、奥壁中央横 2.4mm、縦 1.4mm の護摩壇状の石組がある。窟の雨落から 3m 程前面に平場が形成されており、この部分に宝殿が建てられていたものと考えられている。五ツ谷四坊の上部に位置し、近世は大行事堂社として英彦山霊仙寺の主要堂宇として機能していた。



図表 68 経窟

③社殿

■産霊神社(行者堂)

行者堂は、山頂 9 合目の標高 1100m に位置する。高祖堂、役行者堂とも呼ばれ、神仏分離後に産霊神社と改称された。

建築物は、一間社入母屋造、銅板葺、向拝 1 間、三方霧除付で、二重切石基壇上の野面石礎石に柱が建つ。

建立年代を示す資料は確認されていないものの、細部様式が 19 世紀中期の特徴を示し、上宮の本殿、拝殿との共通点が見られることから、同じ時期に建立されたものと考えられている。



図表 69 産霊神社(行者堂)

■英彦山神宮中宮^{ちゅうぐう}

英彦山神宮中宮は、英彦山の中岳の中腹に位置する。祭神は宗像の三女神であり、豊前国宇佐島から遷座したとされる。

英彦山神宮中宮には、安政 4（1856）年、鍋島斉正が寄進した木造社殿があったものの、平成 3（1991）年の台風 19 号の激甚的な災害により滅失し、現在は同所に石祠が建立されている。



図表 70 英彦山神宮中宮

■登拝道

登拝道は、英彦山神宮の石鳥居から木鳥居に至る道である。石鳥居や下乗石等の石造物が残されている。



図表 71 英彦山神宮下宮鳥居

④墓地

英彦山坊家の墓地の出現は、天正、永正年間頃にその初源期があり、大友勢による「天正の彦山焼討ち」以降、再興集落の形成に伴って墓地形成も図られたと考えられている。

英彦山の集落と墓地の配置構成は、智室谷墓地のように、基本的には各谷集落に付随して墓地選地が行われ、坊家毎に墓地が設けられている。しかし、必ずしも墓地形成の場所は固定した範囲に存在するわけではなく、様々な場所に墓地が形成されている。但し、四土結界の概念は貫かれ、結界道などで区分し、死を忌む実報荘厳土より上部には墓域は形成されていない。近世以降、増加する墓地に対応できなかったことの影響か、坊脇のテラス等にも多くの墓が営まれている。これにより集落と墓が混然一体となっている。

形成規模の大きな墓地は、西谷墓地、阿弥陀尾墓地、別所墓地の他、座主御廟峰廟、有力坊院の政所坊墓地等が確認されている。

また、坊家の墓地には、平成 8（1996）年に調査を実施した大河辺山伏墓地のように、集落から隔絶して形成された墓群落の存在も確認されている。これらの墓は、英彦山基層山伏の墓地と考えられ、英彦山修験集落最下部に置かれている。

■大河辺墓地

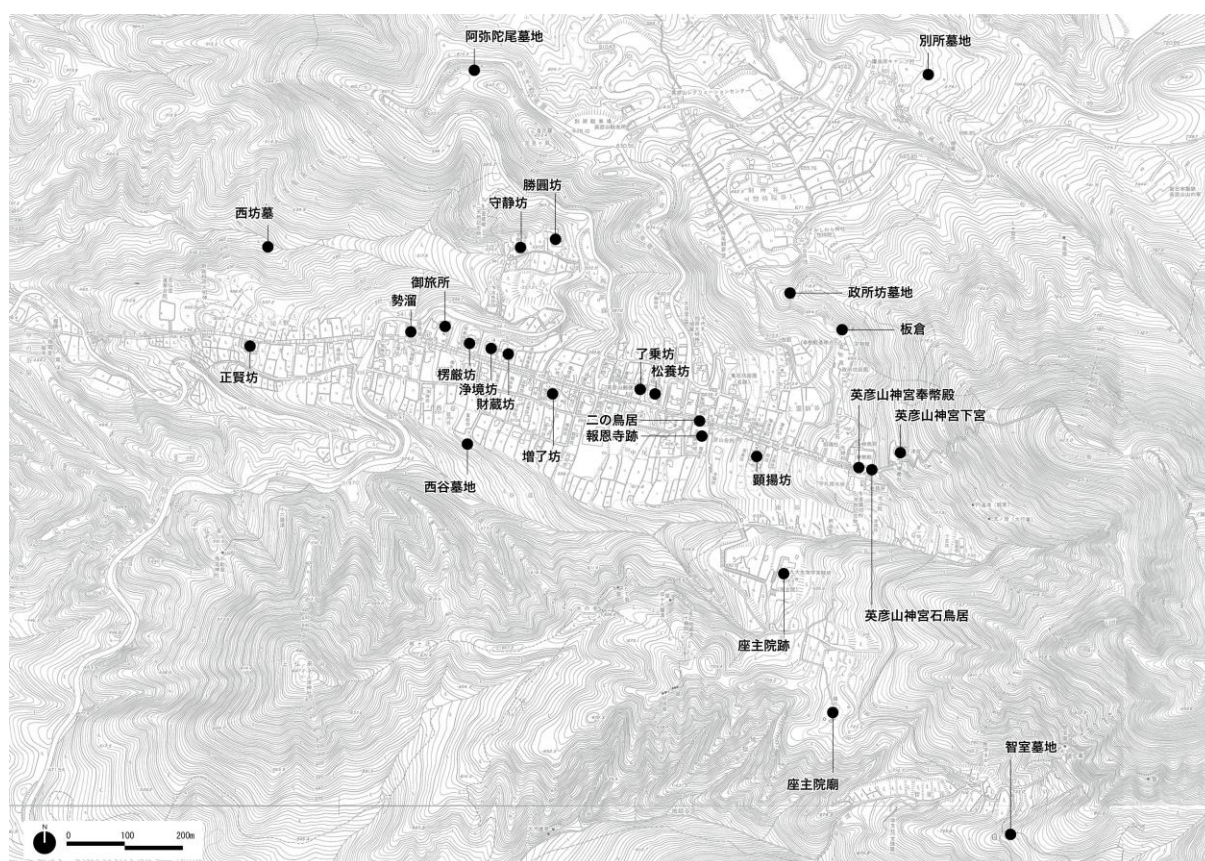
大河辺墓地は、汐井川と智室川が合流する「出合」と称される周辺に所在し、標高 470m の四土結界「方便浄土」最下限に位置する。周囲には坊集落はなく、北側 500m の位置に座主相有も隠居所とした南坂本「月華院」がある。墓地規模は広大で東西 50m、南北 40m の比較的緩やかな尾根に 50 基に及ぶ墓地が検出されている。

検出された墓石は、元禄 5（1692）年～元文元（1736）年のわずか 50 年あまりに形成されたもので、坊名を持たない墓が多く、墓の配列が小グループでまとまり、夫婦、親子といった最小血縁単位で構成されていることから、英彦山基層集団の墓地とされている。

室町時代後期以降、英彦山では峰入りが開始され、集団での修行が体系化される中で「度衆」と呼ばれる基層山伏が出現した。基層山伏は半聖半俗的な強力集団として、庵室を谷筋などに構えていたとされる。『明治初年坊中図』の大河辺付近に、「この付近グシン藪という、昔グシン坊外坊中あり」という記述があり、英彦山では江戸中期頃には庵室小坊群落があったものと思われる。

iii. 境内と門前領域

境内と門前領域には、英彦山神宮の社殿や座主院跡、宿坊、墓地がある。



図表 72 境内と門前領域の構成単位の位置（図中の宿坊は建築物が現存するもののみ掲載）

①社殿

■英彦山神宮^{げくう}下宮

英彦山神宮下宮は、英彦山神宮奉幣殿の上の地に西向きに建つ。

前身本殿は、永禄 11（1568）年に焼失し、慶長 10（1605）年に再建された。その後、寛永 4（1627）年、享保 20（1735）年に再建され、寛延元（1750）年に修復された。前身拝殿は寛永 7（1630）年に建立され、享保 20（1735）年に再建された。現本殿と拝殿は上宮と同じ

く佐賀藩主鍋島齊正により安政 4（1857）年に再建され、昭和 7（1932）年に修理された。

本殿は、三間社切妻造の銅板葺で、高さ 2 尺ほどの切石積みの基壇上に建つ。幣殿は、正面 1 間、側面 3 間、両下造銅板葺である。拝殿は、正面 3 間側面 2 間の両脇に正面 1 間側面 2 間の室が並ぶ平面の建築物である。

下宮の鳥居は、奉幣殿の脇に位置する。寛文 3（1626）年に佐賀藩二代藩主鍋島光茂により寄進された。



図表 73 英彦山神宮下宮

■英彦山神宮奉幣殿（旧靈仙寺講堂）

英彦山神宮奉幣殿は、大門筋の階段を上がって左側に南向きに建つ。英彦山の中で最大規模の建築物であり、旧天台宗靈仙寺の講堂である。

明治元（1868）年に神仏分離令が發布され、堂内の仏像は明治 8（1874）年には破棄されたが、建築物は破壊を免れた。『彦山流記』によると、かつて 2 階建の仏堂が存在したとされる。

前身建築物は、永禄 11（1568）年の大友宗麟の焼き討ちにより、下宮の社殿等とともに焼失したが、奉幣殿西妻軒下から礎石が確認されている。礎石は 0.6～1.3m の安山岩系の方形自然石で、検出位置や大きさ等の状況から縁束石とされる。礎石列から西側 1.5m の位置には幅約 50m の雨落溝の遺構が検出されている。現在の建築物は、棟札によると、元和 2（1616）年に小倉藩主細川忠興により建立された。平面は、正面に 1 間向拝、主屋前方に正面 5 間側面 2 間の外陣、後方に正面 5 間側面 2 間の内陣、外陣と内陣の側背面に 1 間通りの入側があり、四方に 1 間通りの霧除がまわる。



図表 74 英彦山神宮奉幣殿

■御旅所

御旅所は、英彦山神宮下宮に祀られた英彦山十二社権現の御旅所であり、仮殿とも呼ばれている。

御旅所の存在は、神幸祭及び下宮の創建と深い関係がある。御旅所の初見は、東南にある石碑から文禄 2（1593）年である。現在の建築物は、明治 12（1879）年に再建され、張出が昭和 50（1975）年に増築されたとされる。

建築物は、正面 4 間側面 3 間の入母屋造、正面に 1 間の庇、側面に見付 1 間半見込 2 間半、切妻造、亜鉛鉄板葺の張出が付く。高さ 1 尺ほどの基壇上に建つ。御旅所には、大門筋から見て右側に池が作られている。



図表 75 御旅所

■^{ほうおんじ}報恩寺跡

報恩寺は、英彦山の菩提寺で、山伏の葬儀は報恩寺導師によって執り行われた。英彦山の祖霊を祀る大切な場所であった。

報恩寺前には祖霊を供養するため、豪潮律師が建立した巨大な宝篋印塔^{ほうきょういんとう}と報恩寺境内地にも宝篋印塔1基が立っている。

報恩寺は、創建が定かではない。座主相有が正徳5（1715）年に編纂し、英彦山景勝地を詠んだ『彦山勝景詩集』によると、十二景の内に「報恩晚鐘」として夕暮れに響く報恩寺梵鐘の音が英彦山の情景に挙げられている。また、『明治初年坊中屋敷図』にも「報恩寺」と記されていることから、明治時代初期までは存続していたことが分かり、廃仏毀釈により廃絶に至った。



図表 76 報恩寺跡

■二の鳥居

二の鳥居は、日露戦争戦勝記念として、城嶋炭鉱主（田川郡大任町）であった肥前国杵嶋郡大町村福母（現、佐賀県大町町）の城嶋敬五郎吉貞により寄進された。明治39（1906）年の刻銘が記されている。



図表 77 二の鳥居

■^{せいだまり}勢溜

勢溜は、英彦山神宮銅鳥居の前の大広場であった。かつて英彦山詣での群衆で賑わった場所である。

石段の傍らには「下乗石」が立ち、ここで馬、駕籠を降り、身支度を正して鳥居を潜って参詣していた。



図表 78 勢溜

■英彦山神宮銅鳥居^{かねのとりい}

英彦山神宮銅鳥居は、青銅製明神鳥居で、寛永 14 (1637) 年に佐賀藩主鍋島勝茂の寄進により建てられた。かつて彦山町の付近にあり、貞享 3 (1686) 年もしくは元禄 14 (1701) 年に「浮殿地」である現在地に移され、その際、柱輪を一個のぞいて移築されたとされる。



図表 79 英彦山神宮銅鳥居

■板倉^{いたくら}

板倉は、かつて天満屋旅館の裏にあった。昭和 40 (1965) 年に天満屋宗木氏より英彦山神宮に寄贈された。

建立年代は不明である。

『明治初年坊中屋敷図』によると、板倉は、座主院の「文庫」とされている。

建築物は、正面 5.91m、側面 4.95m、一重二階、切妻造、本瓦葺の建築物で、周囲を切石で固めた基壇上に建つ。



図表 80 板倉

②座主院跡

座主院跡は、南谷に位置し、今日、城郭のような石垣群、御殿・仏堂・門等の礎石、山際に庭園があり、御殿跡より下がった位置に屋敷の石垣や礎石が残されている。

座主とは、彦山（英彦山）および末派の惣管領であり、霊仙寺貫首とも称されていた。正慶 2 (1333) 年に後伏見天皇の第六皇子助有法親王が迎えられ、筑前国黒川邑に「黒川院」（御館）館が建てられ、以後妻帯・世襲制となったとされる。黒川院は、天正 6 (1578) 年に秋月氏により焼失した。

彦山は、同 9 (1581) 年に大友氏により焼亡し、同 15 (1587) 年には秀吉により神領が没収された。慶長 5 (1600) 年に徳川氏により「先規の如く守護不入十方檀那たるべし」と裁許され、以後復興する。

同 6 (1601) 年、豊前領主である細川忠興は座主に千石、隠居御室に百石、奉行坊家に 50 石を寄進した。また、日野大納言輝資の次男の玄賀を細川忠興の猶子とし、舜有座主の孫女昌千代との婚姻が成立する。新座主忠有を迎えるにあたり、新しく御殿が建設されたとも伝わる。

③宿坊

宿坊は、山伏を先達として彦山に参詣した時の宿舎であり、加持祈祷の場である。

江戸時代の山内は、水田や畠^{はたけ}は禁止され、屋敷内の小園芸程度しか黙認されていなかった。寛文 11（1671）年に、消費地としての坊舎集落の利便性に答えるため、中谷地区に町筋が新設され、商家 50 軒（「町」後に「彦山町」）が建てられ、貞享 4（1687）年に大門筋（表参道）が完成したとされる。元禄 11（1698）年、防火のために坊舎における茅壁は禁止され、同 12（1699）年敷地に竹を植えるように命じられた。

坊舎の数は、文化 4（1807）年時に 258、天保 9（1838）年時に 240、文久 3（1863）年時に 259 であった。明治元（1868）年の神仏分離令および同 5（1872）年の修験道禁止令により、神仏習合の英彦山では山伏の渡世が不可能となり、坊舎は急速に消滅し、修験道集落は崩壊した。

敷地は、大門筋では、尾根筋にあって参道の勾配がきついため、間口（東西方向）は 20m 程度と狭く、奥行（南北方向）も斜面になるために 40～60m ほどの敷地が多い一方で、大門筋から離れる宿坊は、等高線に沿って造成されるため、比較的面積が広い。敷地内は、客殿の前に庭園をつくり、参道との間に石垣を築き、入口に門をもうけるのが一般的である。庭園の多くは、客殿と参道もしくは道との間につくられ、斜面や岩石露頭等を利用し、湧水処理等に用いられている。

建築物の平面は、主に参拝者の宿舎と加持祈祷の場である「客殿」、日常接客の場である「ヒロマ」、生活の場である「内證」^{ないしょう}で構成され、その他厠^{かわや}、風呂、付属屋が見られる。基本型の構成は、「客殿」と「内證」が平行に並び、その間を「ヒロマ」がつなぐ

矩折型と呼ばれるものであり、土間は農家ほど広くない。

宿坊は、度重なる火災と大風による被害を被った。特に文政 5（1822）年、同 6 年の大火、天保 2（1831）年、同 14（1843）年の大火の被害は甚大で、多くの坊舎が被災したため、宿坊の建立年代はほとんどが天保期以後の建立と考えられている。そのような中で、文政期まで遡るといわれる宿坊は守静坊がある。守静坊は、「内證」が失われているが、文政の大火をまぬがれたと伝わる。

宿坊が立地する集落の形態は、江戸時代初期に確立された英彦山十谷と呼ばれる門前谷集落と山中谷集落があり、各々の集落には個別の宿坊集落の名称がある。また、その後形成された新屋敷と呼ばれる宿坊集落が存在する。平成 27（2015）年度の『英彦山総合調査』における『明治初年坊中屋敷図』とレーザー測量による分析により、各宿坊が立地した平坦面は特定された。また、建造物調査により、現在まで受け継がれている宿坊の建築物が確認された。宿坊集落毎に、宿坊跡と特定された平坦面が残る宿坊跡数と、現在も建築物が残る宿坊跡数は次頁の表に示す通りである。

図表 81 宿坊集落毎の平坦面が残る宿坊跡数と建築物が残る宿坊数

宿坊集落の名称		平坦面が残る宿坊	建築物が残る宿坊	
		宿坊跡数	宿坊跡数	宿坊名
門前 谷集落	中谷	3	—	—
	下谷	26	6	松養坊、財蔵坊、浄境坊、 楞嚴坊、勝圓坊、守静坊
	別所谷	29	—	—
	上霊仙谷	13	—	—
	南谷	7	—	—
	中尾谷	7	1	顕揚坊
	西谷	34	1	増了坊
山中 谷集落	地藏谷	3	—	—
	玉屋谷	9	—	—
	智室谷	6	—	—
	五ツ谷	2	—	—
新屋敷		5	1	正賢坊
合計		144	9	

* 平坦面が残る宿坊跡数は、図表 82 及び図表 83 の宿坊名が記載された平坦面の数